



四書系傳錄師

文狂詩集  
山東徐作  
賈氏父子版

^ 13  
3952







序

近來世より行なはるる経典録のよまむと聞よ。  
唯梅よはかへんうよをよまむと聞よ。  
よ自の杖園の提燈。愚國八兵衛と  
も作。土平の所もは。法入大門  
り。まら。む。の。や。藍。丸。此。志。く。りの。行  
庵。之。は。雖。然。輪。坤。は。く。癡。呆。組。の。使。徒。ハ。  
別。深。の。井。を。ど。何。の。ま。か。ら。は。た。高。能。名。と。い。ふ。事。  
石。橋。固。木。曾。海。迄。近。を。この。橋。も。なる。所。を



門 13  
號 3952  
巻

芝蘭の室。鮎の店よりかんざしを一つふりて  
寝て居りて。虚ろ色うろろいろの瓢物ひょうものが鼻なをよん  
蝶帳やんまよゝゝもろもろやア道みちハね云爾

寛政二年庚戌孟秋

山東市隱 京傳自序

戲作四書京傳予誌

目錄

大樂 通用 豊後 申

大樂ハ月雪花をわき江ふつひ色と酒と  
みだのんぶたることをあらがるといふむ

通用ハ質物の通用物の事やをひん  
らんの女郎買をしめむ

豊後ハまぐく江戸げのやのこんどち  
をうめつ

申ハおろろあんまの申あしをわりの  
あこころをさしむ





長三堂藏板



長三堂藏板

長三堂藏板



京傳予誌并言

近來著書刊行之盛前古所未曾有也。經史百家有用之書暫措。稗史小說殆似無益者。亦陸續刊出。屋上架屋。不知者以為害。而識者有取焉。夫稗史小說之裨益於婦女童蒙。不鮮少矣。是金聖歎所以評訂水滸傳三國志也。歎同業鈴木君。年々魁春。發兌野史多種。每得雅評。是雖由君精選刊書。抑亦非有大方吹噓。曷克至此。今茲所刻題京傳予誌者。則係京傳翁擬經典餘師。而所載筆行文諧。渾導愚發。余知其決非無用之書也。識者一讀。必信余言不誣。伏望博雅君子。賜購覽重辱高愛。判語何崇。過之當君微一言書之以辨。卷首併代君謝愛顧諸彥云。

明治十八年三月扶桑橋南西涯畏三堂主人識



# 大樂

意氣狂句

堅衆曰大樂功者之虛言而  
兎角入欲門也於隙可見通  
人為樂氣質者獨賴金銀之  
損而貧乏次之客者必由是  
而迷焉則庶乎氣差矣

それ大樂のうらむをうらむ春ハ名川の汐干よ何ぞ云



て身代のひらこころあるも思ふもほど恋の淵の深さふ  
 ちまりてまんとしつゝのあゝあゝのあつたてありと  
 とどめくちをどろりけりもやまらぬあり或は上登り  
 辰山花鳥山の花見は禁閑養老を引まじくを法  
 行を帝の種よりもやれむやう小敷くする密  
 花のとりを合ひ武家方の血氣盛あるん喜色こふ  
 うごたせど先よのまゆるんよござぬがん勢のい  
 らぬたのしことちうげ一日金一分の借鳥は報亦く  
 を跡の滑りもうりまいたちまら心の約のもづかゆ  
 るとて大門口はほあぐ中の町のあぢの寛保の昔よ

かきしねど人おすからざる寢の君が名びは  
 の蒸粉鍔の山をなす橋もひんあへうつら  
 まてせし花よえゆる花のくもきささう目よ  
 あやま山崎をゆゆ魚のうもくの声よとめて心  
 つまのうら夏があささうか今もいらつと虎とび  
 くの君清よまぬけのし客人らんゆると若狭の  
 るまのうらむをうらとむれつ中り二はあざんとう  
 がむらひもあささうあつららたちゆうあささうりべ  
 あささうあさあんであささうあささうあささうあさ  
 あささうあさあんであささうあささうあささうあさ





よいエ〜 ちねおまきせんぞいごびりのませぬらん  
 のとあ〜 どのいんちりいさるい昔忍一ツ春ニツ  
 のとあ〜 酒が人をのんど宿の車い子まきれ  
 川つ流〜 七あまひまきしひあよそむきととのあ  
 碗をおろ〜 木乃伸らうが蜜人よあつ〜 遊ぶあ  
 わり復らるる水よ遊舟をうこのあ江戸産者のひッ  
 こぬき〜 つ〜 みだんおひらり小舟八人この  
 人数舟を〜 ころを涼うなと口どまむそがらうら  
 三弦にて〜 び〜 の大さ〜 ぎ〜 さいのせん  
 より陸よい舟を〜 ね〜 隠者〜 一〜 ぎ〜 び〜

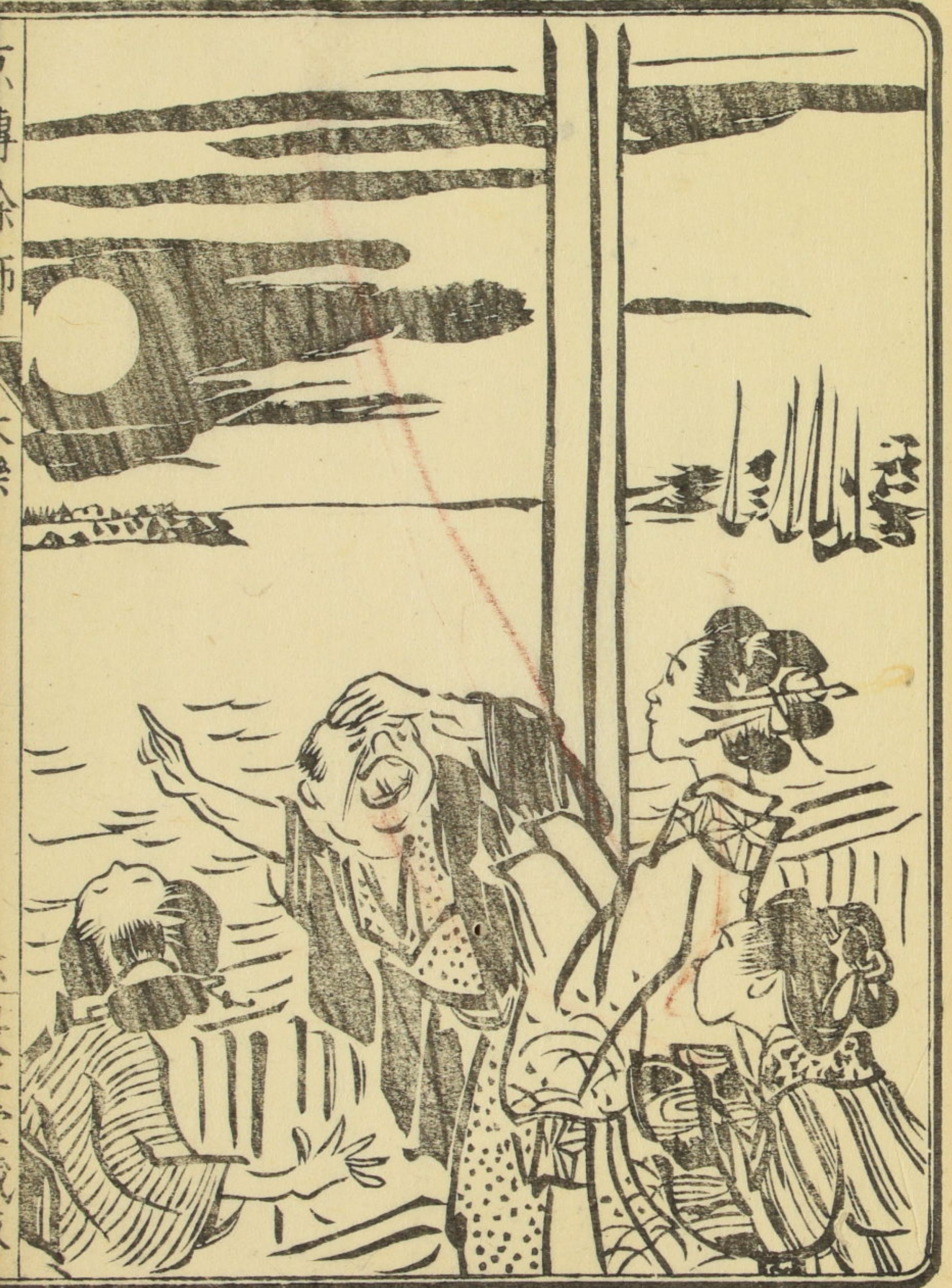


君あつてもうお花おび襟おどろくとも人不知と流  
 の意いへるも盛者必衰の及程をあらぬを  
 ぞぐ下や千住の愚貞をうのぞく女ら貞は袋と  
 云とらうふまがつらぬ俗物どやりのあのやうふさ  
 ぐもまお貞の戯も下ややんよんまであるぞ  
 と憂世を悟り形あるも実ハ形あし世のまけと  
 一とを拵まへせんかめつらぬ思ひあかしのふ  
 感るも根が己が心の欲るあふあさるるにせ  
 とゆぬあとの迷懐ぞかし隠者も形があらば生  
 若必滅の場あくまもつらぬ一隆くらあを評する

る岡焼餅の隅をまぐむう一日もくまぬまや  
 舟よのまこといふは舟の目もくまぬ舟うらたがり  
 て香もまさんと津波の何をおが水室よ下知て隅  
 田堤の下ふこそまぐませ中田屋うむさやうたじ  
 い舟をのつこのむせま後のお屋こりみまらら  
 流とらむあまも酒色のニッふのこまあつたり  
 文月の廊の燈籠み所を照しゆの油角よ持が  
 あまをるもあかり周夜とあらん糸色を新毎  
 小とのつらぬるてもらん客人の身よりあつたれ  
 出金玉うとうたがひ唯人の気をつらあつるせんま



いどけあひ客の目をやどらるせさらふ内幕の  
 からりとと思ふまじく縮張の燈籠のさつてえも  
 ど女郎の薄情ある物のうちいさこもるぞこの  
 うられ硝子細工の石君をささるふつうたうと  
 あもるこそまほそのおとりの正徳のむろ中万字屋  
 の玉葉が追善のこあふとやいさあいさまこと今  
 いそまふひまうとく雇人を迷もは燈籠のあうだ  
 ちとるなまより近來附合のうよまをとりつるあり  
 さるりのいとうと燈籠のさのくことすこふむだ  
 るり十ゑ夜の月えまのさるも縁まきる今宵の





月をめでし詩を作り舟を添ふ梅を梅を梅を梅を  
 け夜色里のふれをひらてふさらありけ日深川八幡の  
 祭れけけ土橋仲所三橋彩古の石場ふつる中を  
 一年の大紋日月えと祭れとと兼備する遊び千  
 日小うつて茅も一夜ふやろがくつけのせとあり  
 のとの百姓とある店考あきば百日の洗法も尻一ッ  
 又放る院をひらくお寺極ありこそぞまねの月小  
 何れぞつひの隠居の月えとあらきたり旅行の  
 月も一風流と南驛の傀儡ふらちことあね坂村田  
 新叶己がさあぐ助六の氣位よなり整のまけの

ろくろ安房上総の月えと真ト田毎よりも車と  
 かんぐく君えまる伯母捨ふあまが日業をさしじ  
 あまでも次広ぬあくくくくくくくくくくくくくく  
 又言輝のまきりうぬる輝をちらくくくくくくくく  
 そ外場くのきうかある色里まで月の光りのりその  
 あくてまお急の月ちんるふらどか一ま橋の月ハ  
 今さらいらも君うをり亦海安寺の山麓ちののち  
 えまのあまぎや今まであつる息子とりぐ化粧の  
 ええんがうしてまての鬼住屋ふらけくくくくくくく  
 綿より二重の紅圍の綿ふくらるくくくくくくくくく



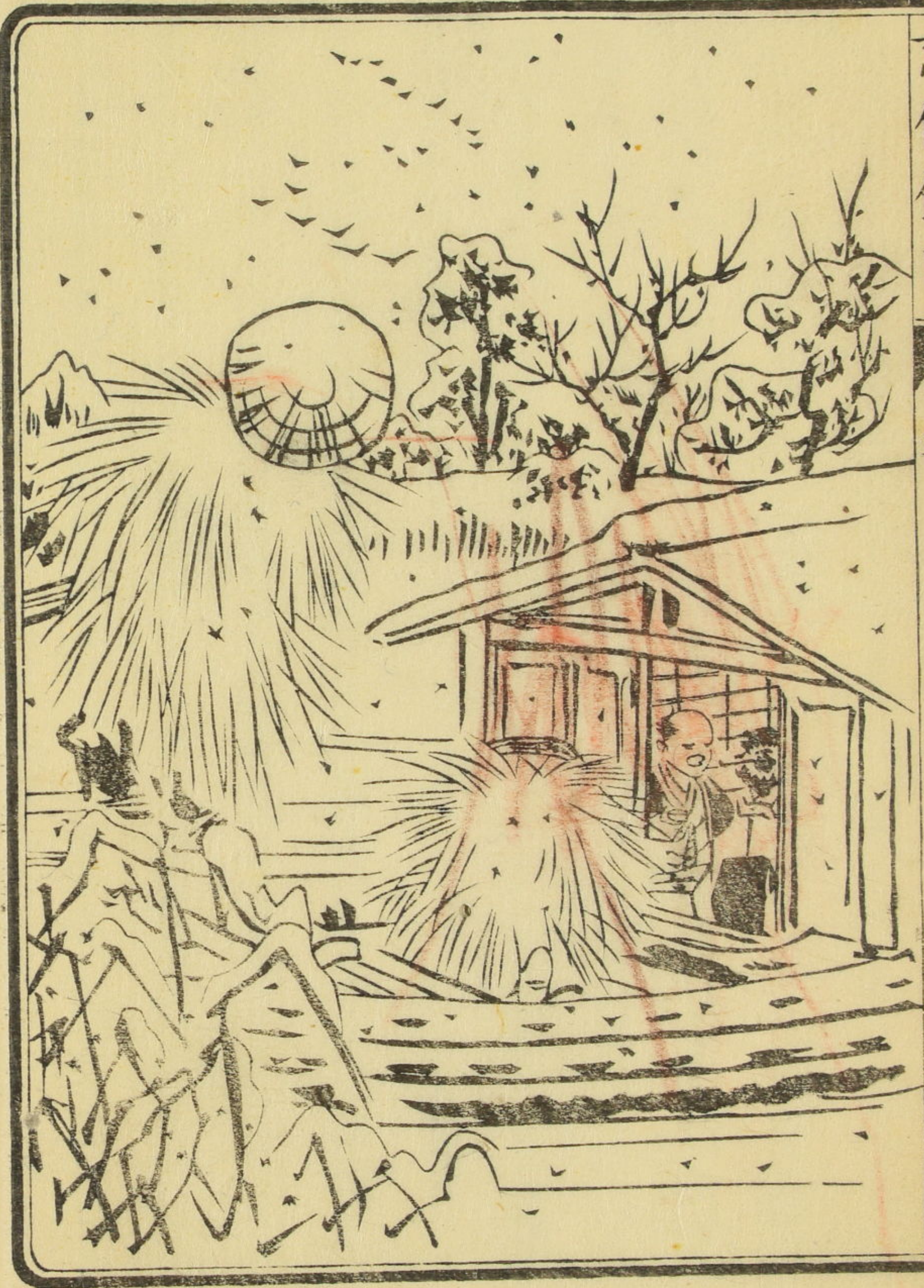
是れ文の雪うんとて 赤根舟小居大燈うらきよあ  
 らぬ志んのしる 晋の謝安よすけぬ氣を 別様の妓  
 をとづきえあらんふらんぶあまぞとらよ句よよくか  
 らしひ。こどゆが傍よりむらみ傍のこころ 浮舟のふら  
 らきもえあるなりま秋の南力こつ の戲場杉田の  
 梅え印の傍の月え玉川の 祐祐まあるのぬきえ金法  
 の雪え印雪おりのあいかどくそがこころ 是天地と  
 りみ神主人のちうらりりまそたのこころつらるるか  
 ちうきどくもあは月雪花のこつふとむむこころいひあが  
 つまらららるりの女色やどりのあはるいあは 一月のきりり

とく女郎の指の鏡ふあうどあゆのあ白あつとて抱て  
 痛たあめもあは花ののさねがむらづととて  
 口舌もあはばそきよりのも眉の月を中う 肌い香  
 をあざむらぬ花をまらせあふつてままそやド  
 むららぬ美人をえとくたのむやどあ何ぞやうふ  
 赤のあらんや花より赤子をききより 気とを飢  
 鐘年よままこころのまあうどとまきま量の味あは  
 女色の傍をうらぬあなぞかこころ人皆見う回  
 らしひ今時のたのこころをえらふはまるととらこころ  
 女色はとけるあつむらも人情ふうつらるるあ

京傳館館

十一 豊三堂 藤林





ま子衛の君が女よのろまをえりつれいさぐ地をよ  
 のむののををよのむがゆきまののをまどと日  
 たり兜角控ぐりけいけの迷ひとまきとたりけ  
 ども富芝のころちありと地あるこのとまきとて  
 も難し花がうつくしくいともおきよは居續もあふ  
 月の明ありとそり窓うちえてお真もかきとま  
 るおも面白うとまきとまきとたのしみ女色ふとま  
 るとらいつひあがらつまることまきありまきと入  
 山あまの君なるも奇文と思ふまきとやけりまき  
 多く鶴ふのり籠あまきと籠まきとら物をまきと

京傳餘部 大集



うろく羊とあるは仙術よりもたらすと云ふは然りと雖も  
 先日のつひつはつを覚るの中と云ふはさこそ重祿の勢  
 ひこそあつたなりきつらば金銀のたのしみなりぬ  
 うとあつたごころにてたふあらば龍淵の聲をまげて  
 枕とてあつたごころちふありと太平樂をのべごころ  
 を思ふがあつた又金銀のあつたは唯ふあつたごころ  
 のたのしみごころの世のたのしみ俗物まらうごころ  
 かごころたのしみあつたごころちふあつたごころあり骨  
 牌よりつらば目もあつたごころ酒あつたごころぬ夜のとほり  
 おごころたのしみごころ好めつたごころあり又女とん中

してあつたごころのちふあつたごころたのしみなるのこ  
 又酒中あつたごころ体枕のあつたごころ女房とごころ  
 よ一壺のんであつたごころたのしみぬ天徳のひたご  
 りとあつたごころのちふあつたごころたのしみなるのこ  
 かごころたのしみあつたごころのちふあつたごころたのし  
 むらあつたごころたのしみあつたごころたのしみなるのこ  
 ろりあつたごころたのしみあつたごころたのしみなるのこ  
 あつたごころたのしみあつたごころたのしみなるのこ  
 するその子樂をさる孫を合さると一人のあつたごころ  
 孝とあつたごころたのしむらあつたごころたのしむらあつたごころ



起てなごらひまをひりやで日本一の涼の場おとのてをや  
 ささき考徳群集したる地も今日い忽一河の流もこと  
 変ぞども流氷あつぬ感衰の世の中を天のあつら  
 しむるところあり。やんよそのやナアと歎息するも  
 をのまごぞひごみのある〜

大樂畢

通用

若衆曰無錢之謂通不迫之  
 謂用通者半化之貧乏用者  
 紋日之出入其錢乃寬永年  
 中通寶大夫恐其久而絶也  
 故筆之於文以授格子其子  
 霄言無理中亂寢客衆不逢  
 意氣狂句



ソノヨハナルセンリトハセバコレヲスチワタリクガイニ  
 其夜爲千里語之則渡苦界  
 マケハツレラスチウラデカクル  
 省連則恨藏於店下畧

そま通といふんぞ列子いふことあり徳をのりて  
 人ふらう之を聖人と僧徒をいふ人ふらうつあまを  
 通人と僧といふ言こつつけくえまびやく今の通と称  
 する若くあつてもり徳も金銀ののりまふや川で  
 も活けよ持て居る者の氣負ひあく難は唯通と世  
 まとの差別を知つをいふ通と僧と世まふよふ  
 差別を志くざるを世まといふんや予らふ通届の二

字をいふのまふかきたんをいふ風陳せん末万里  
 を井といひ井を十あをせく通といふ是をいふ一若  
 きばふ方のまの外までもよくせうちまる通とまじ  
 又書の首よりきれくのく末までも金くしてまふか  
 たのころ記するな記を通といふべし如末よことめ六通  
 あり井は圓通あり衆の仙人も通をうらまふて下界  
 たまひと知る旅も通方うせての麴町の市ふさらさる  
 吾系通深川通是居通といふもよくまふをいふる  
 をいふべし又用の字をいふん天地金功あり衆を  
 金用あり又人は用ありと人用らうていふ女もた

京傳餘師 通用 十二畏三堂蒲抄



ちまうち西新造橋とあどろき用らまぶる時ハ麒麟も魯人の古傘よ色中色牡丹紅葉の類とあらん又傾城の言よを流をやそそ〜紋日物目をたのむこまを熱く用とらあつり又急用とつこつたる丈よ用のあつたため〜海屋の山用沖用のわら車取こま等よのつとる流あ〜又通用とつ〜時ハ雙物の通用あのもありこれふつ〜以日一ツの奇法ありなる小表法を爲さ〜といふ者ありき身代ハ飯器よ車を志りもるくらあなの〜なるまば何くらららぞ一燈ハ傾城買よ身をせ〜ね〜花ふめで月小

うらまゐるあも志のび嵐あも西ひまき方の鼻ひ〜ろねが者の略希をさ〜とせぞえ旦の庭のた紀実より方二十日の恰臺あるひまで月雪花のことツ満園のうらふ〜七化をさ〜もそのと〜中る〜を志〜而後のせ不隠差ま〜義痛の別業よ〜此こそ孤獨の〜も世をあぢふまね〜る奴ある〜されバ昔〜する并屋流の三味線もらの根メよけまぶ〜の潤ふあら〜と〜世を〜チヨロの常〜結びを都も〜安〜ひ〜和佐吉やの燈管ふんのゆあを通〜小人困居〜る舌を〜

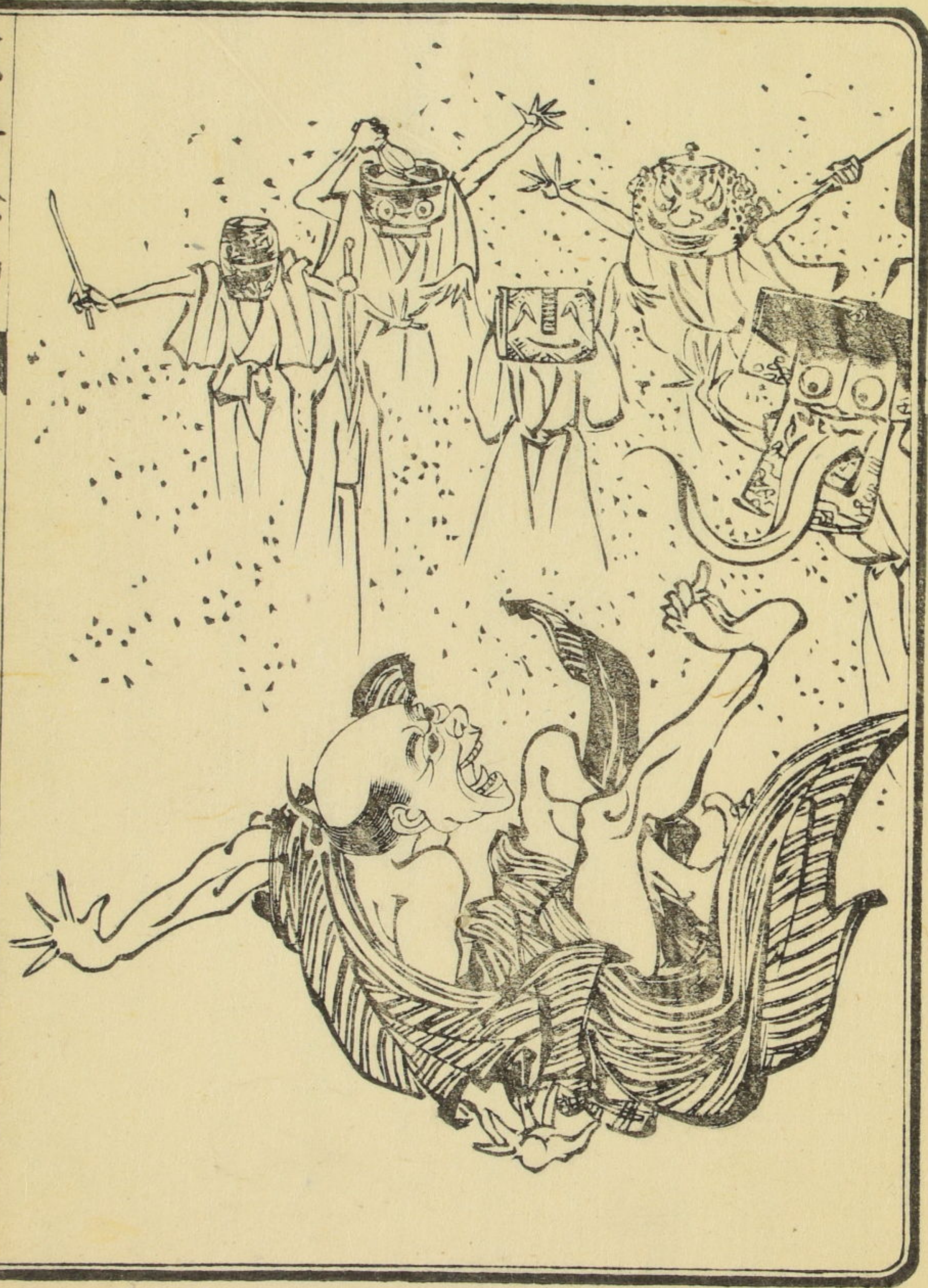


のしやうめをたふしきねねぐらんやくも片肌をのて  
 脚さかんひをもちき後うしろのしきねぐらんも外と山のうきもふ  
 ひとくだんぐふきんぐあり勢ひんねたわぐも  
 りうう角かくとまきくゆうふ眠ねむるも梳とをかろうきまら  
 惟ただぞ時とき宗むねふあらねぐ祐すけ成なりが出い身みふも何なにのやぐ  
 時ときあらねぐ池いけの水みづ鷄けいともなのまきまきとあううう  
 と首くびを何なにぐまぐべいのともりうふ異い形ぎやうのむけね  
 あらまきまきうう風かぜをかろくあうぐたぐをそろく  
 さたとんうううく混ま氣けの息いきまきさうう各それぞれをつらぬく  
 鳥とりあうる一目ひとめえうううう氣きも認たずみ夫おと上かみ口くち飛とぶさうらふ人

ら地ちいあうるまげうぐ彼かの化まじ物もののうらち改かへとあやたがううげ  
 ある声こゑくくけうのううふ鳥とりまきかあらまをうううとあり  
 きあうい喜こゝろ水みづのむうく海うみあうるびうう平へい家けの二ふた門かど  
 うも何なにらむ化まじ物もの屋や安やすの煤すす拂はらくもあう信しん物ものの精せい之の世よ中ちゆう  
 たまけどののあふぶち教しやくされく魂たまご目めの知ちをうけ七しちッ屋や  
 のうらふあぐあらまきくうかまもやらま流ながもあまぎ迷まよひ  
 舟ふねとまきや八月はつげつあむぐり更さら昔むかしより後あとと云いあまねふ靴くつで  
 我われ場ばふ人ひと質しやくあり信しん物もの又また言こと質しやくあり信しん物ものを信しん物ものとく  
 とい女め房ぼうが自みづか後ごを切きつ時の推おしえまあうて清きよ水みづの舞ま  
 春はると回まわ日ひの満まんありむうくさる何なに業ごうの上うへ人ひとと云いや十じゆと云

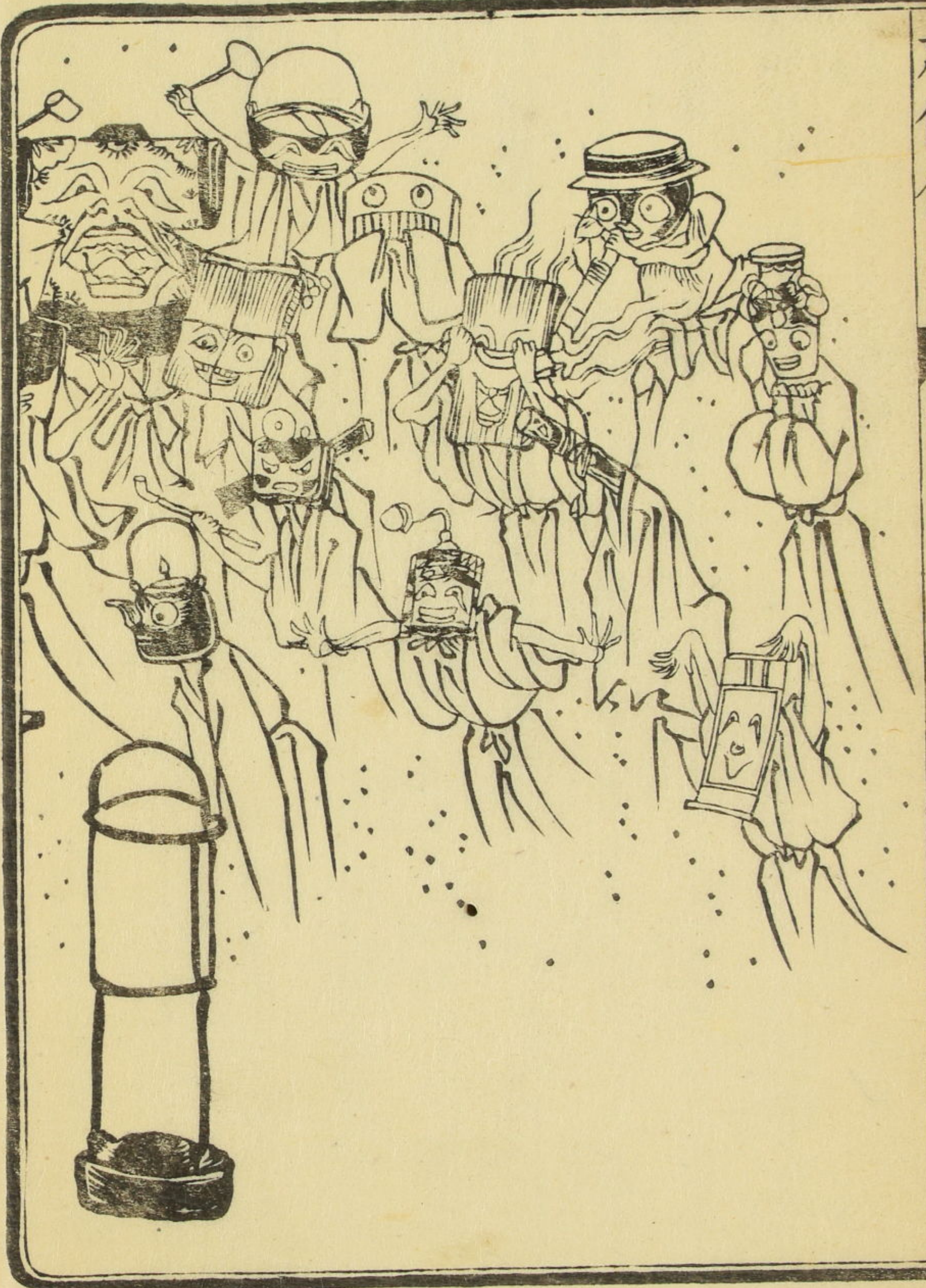


市轉餘師  
通用



世居  
長三堂藏板

京傳餘師  
通用



一  
口  
長  
三  
堂  
藏  
板



せ修よと記する事ありしが修と十念のうら二念とも  
 どうぞとあるは上人は渡九念のこまうらうらるよりこ  
 九念寺と云寺号何方あり今ふのころたるよりを  
 交くあるは佛の方便ともあり又宗と云字を修ふ  
 をきたる連分所もあまは風流のなともなるより古人  
 泊るに己が心を修ふをきたる修あり。新田義貞の  
 こころにこれちかをお例鎌倉頼村が修の海舟に  
 修ふとづらく軍の利運を修神よとてこそころあり  
 修神こそと感修とて彼を力海よとてのこ流き  
 とうやとて修お流うと云云修うらうらにけ付よりののり

ありけると今よきとて修利が流とのあは新修あを  
 うら又修あとのふ言ふゆての萩の上借萩の下修何  
 り或の流とての入りああり天地も又修屋の度と云は  
 修屋あ人のるに修あをたらむとて火の修人にあ修流  
 言の修の換と提れたがとあるとて或は修あま  
 とらふ言あり是十の字の尻をまぐもむ七の字とある  
 是よりなるうらうらあうらひあるより七ッ登と修あま  
 別はゆらんちうの修あまもあまあるけりあるけり修あま  
 をまがむとて修あまもあまあるけりあるけり修あま  
 凡あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 修あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま



舗とのひ借おを典貸とのひ借れを商賣あぞと云倍  
俵あり固我の持るの身がうらふたもく喜まうんあんと  
くらえ火表の難儀をさうつありのあるふくらのあつら  
放増ふ身をとのちつぎやともされば我をさる  
むる事ぞう一或は女布を身とせせんおれくらむら  
らき一お務をお貸よのきも又女布も男まよる  
ひくさう保とあり算約下結禪まで貸入して苦界  
十年振料屋のあふるもむあり或は御堂の代  
お給をさるもあがぶきッ子の尻の穴の産まこあ  
陣あのとらうつとをさるもあがらあまを金ひゆうつら

一人りの娘を人借お入く坊妻ようちとみ入る借  
のらぐくひある名をこのとて富のれを男をさる  
まへくらのらひつめる仕事おのち子を教はもあ  
り武士をさるうあらぬ大小もまげあめいさるあ  
んの佛像までもまげさけお貸をさるうけるあ  
きの恩をうけくおを知らざるがぐらうありとも我  
つらうあつらおびをさるんよまがもさるあけ  
身ハ氣よくひさるまつひお難の柳京の干店ふさら  
さまんけ娘をさるさまんよの参之神の末社とあり彼  
おあおの法がは固ふらゆりおく是者とらるらん



汝ハ世の中あはれもせうちの介まじなればけりあはれをかつり  
きうせせの中あはれの者あはれども小傳つづせのらひあはれけりあはれのど  
さんあてのるあはれにあはれ園あはれ雲あはれ傳あはれをあはれまぬあはれやあはれふあはれらあはれせんと  
修あはれ金あはれ地あはれ獄あはれのあはれ事あはれ辰あはれ方あはれ且あはれ小あはれ志あはれぞあはれのあはれいとあはれ中あはれをあはれこあはれひあはれこあはれま  
せあはれぐあはれああはれらあはれとあはれ色あはれせあはれるあはれぞあはれやあはれとあはれヒあはれウあはれドあはれロあはれクあはれのあはれああはれさあはれぎあはれりあはれ  
かあはれまあはれけあはれまあはれぎあはれぞあはれくあはれにあはれああはれらあはれまあはれぎあはれてあはれ南あはれ風あはれふあはれああはれらあはれるあはれ海あはれ月あはれのあはれお  
らあはれくあはれああはれらあはれりあはれくあはれとあはれらあはれせあはれああはれらあはれるあはれ鳥あはれ方あはれもあはれ始あはれ乃あはれやあはれぞあはれんあはれかあはれをあはれら  
しあはれかりあはれしがあはれ修あはれ小あはれ此あはれ遊あはれ具あはれ小あはれ逢あはれひあはれらあはれるあはれ古あはれ今あはれはあはれ奇あはれある  
るあはれああはれらあはれまあはれぎあはれ彼あはれ等あはれがあはれ速あはれ懐あはれありあはれくあはれああはれらあはれくあはれああはれらあはれをあはれかあはれらあはれえ  
しあはれをあはれ予あはれよあはれかあはれらあはれりあはれしがあはれ彼あはれ修あはれ小あはれのあはれ精あはれがあはれらあはれひあはれらあはれくあはれのあはれ一あはれをあはれ

根ねの急用きゅうようありあくく修しゆ小せうををととととももううけけるるららひひななままちち  
忍にんををううけけくくひひぢぢにに工く面めんををししぬぬるるもも一一忍にんををああららぬぬふ  
ああららままぎぎ一一まま付つひひ必必ぢぢ修しゆのの然ぜんととううつつたたくく已いくくが  
身みををららんんぐぐんんままととううたたぐぐひひああ一一重ちゆうををひひららめめくくらら浴ゆ衣い  
をを深ふかよよ肩かたふふううああててとと結むすままののいいろろをを修しゆ小せうととああららままとと流ながままら  
せせままららとと流ながままららどどもも八はち月げつががたたててるる流ながままららありあり利り上じやうののああらら  
ととせんせんよよううののつつままるるああらら修しゆありありいいろろはは流ながままのの志しのの字じのの一一  
句くよよ修しゆををああららままららとと上じやうををよよててとと女め房ぼうををららままららととめめ一一もも不ふ宜ぎ  
平へい

一 專余市 一 通目 一 三三三三三



京傳金館

通用

一ノ目三堂本

通用畢

ツウヨウマシヌ



